

序文

著者	須藤 健一, 清水 久夫
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	124
ページ	i-iii
発行年	2014-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009328

序文——『土方久功日記』の刊行を終えるにあたって

須藤 健一・清水 久夫

土方久功はポール・ゴーギャンのタヒチでの生活に惹かれて南洋に赴いた芸術家である。東京美術学校（現東京芸術大学）の彫刻科を卒業後、1929（昭和4）年に「南洋原始の美」を求めてパラオに渡った。当時、パラオなどミクロネシアの島々は国際連盟委任統治領「南洋群島」として日本が治めていた。土方はパラオのつぎに、真の「南洋原始」を体験できる島を探して「絶海の孤島」、サタワル（サテワヌ）という島に行きつく。

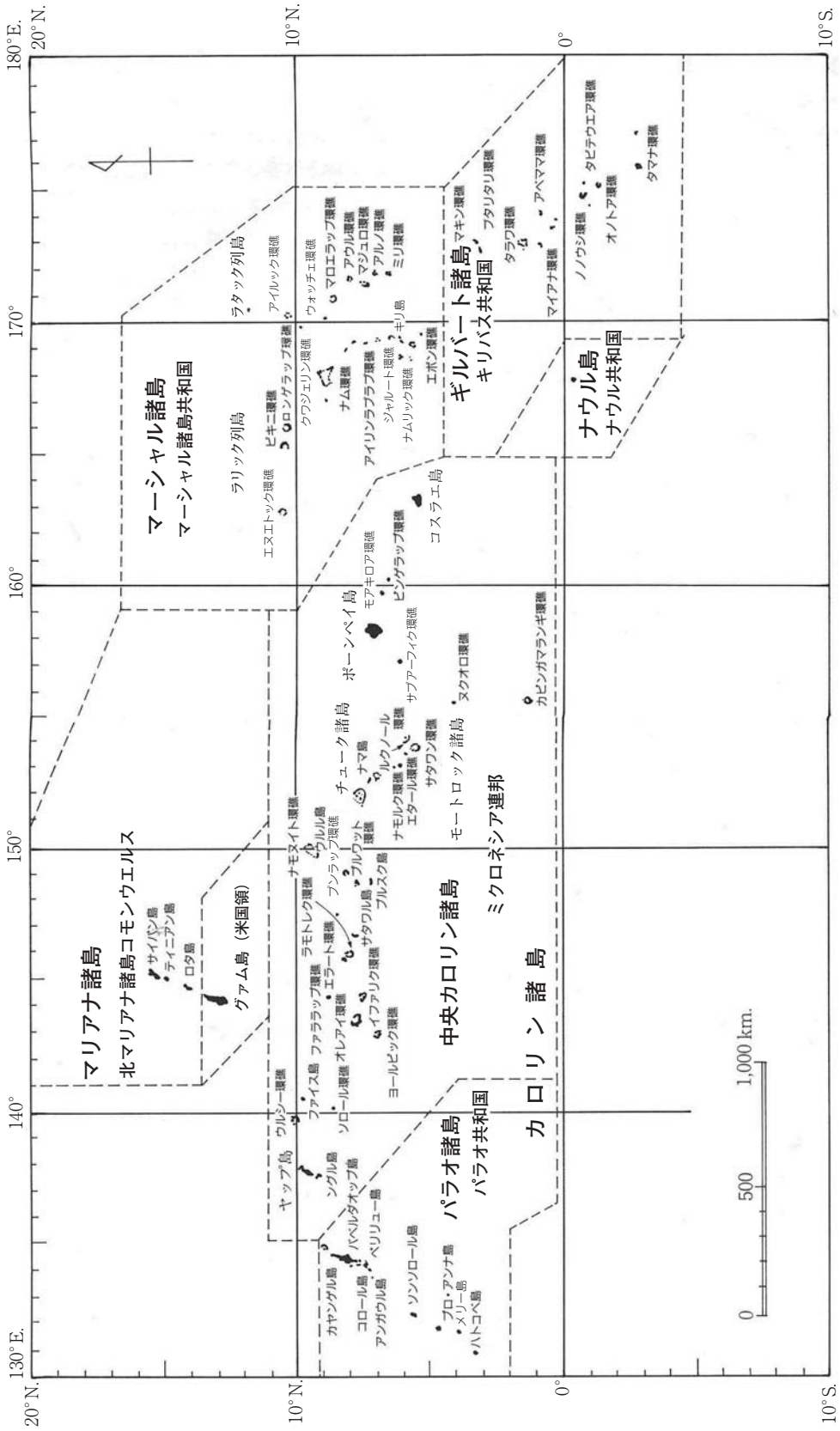
土方はサタワル島に1931（昭和6）年から7年間、パラオに帰還後も4年間をパラオに暮らし、1942（昭和17）年に帰国した。13年間、南洋で彫刻や絵画などの創作と民族学的な調査を行った。土方は多くの作品を残すとともに、神話・伝説、考古・歴史、社会・政治組織、世界観や宗教など、パラオとサタワルの人びとの生活を克明に記述した。その研究成果は8巻本の『土方久功著作集』（三一書房）などに集大成され、そのうち4巻は英訳され現地の人びとにひろく利用されている。

美術学校在学中の22歳の時（1922年）から亡くなる1977（昭和52）年まで、土方は「日記」をつづっている。A5版大学ノートで123冊。日記はパラオとサタワルなど島の人びとの生活を参与観察したフィールドノートでもある。その日記は国立民族学博物館で所蔵し、民族学研究アーカイブス「土方久功日記」として公開されている。それは、須藤健一が土方の著書『ミクロネシア＝サテワヌ島民族誌』（1984年刊）を校訂したことなどの縁で、土方敬子夫人が日記と関連資料を本館へ1986年に寄贈されたからである。一方、清水久夫は元世田谷美術館の学芸員で、1991年に「土方久功展——南太平洋の光と夢」を開催するなど、土方の作品を評価するとともに、民族学的研究を理解してきた。清水は土方夫人に日記を本館に寄贈することを勧めた本人であり、土方夫人（1998年死亡）が切望していた土方日記の出版を計画し、翻刻を進めたのである。

4年にわたる『土方久功日記』の刊行を本巻（第V巻）で終えることにする。第I巻から第V巻までのシリーズにおいては、土方日記の第1冊から第31冊まで、美術学校在学中から南洋群島に13年間暮らし、1942年に帰国して東京に着くまでの日記を掲載した。この間の日記から、日本人の進出と南洋庁の支配の実際、南洋に憧れた土方と南洋の人びととの付き合い、そして芸術家・民族誌家としての土方の生き方などを知ることができる。また、南洋を訪れた中島敦、赤松俊子（のちの、丸木俊）などの作家や画家との交流、八幡一郎、杉浦健一や中川善之助など多くの研究者を支援した土方の心意気が描かれている。

本館では土方日記をデジタル化して保存しているものの、その紙質の劣化が著しく、現段階で活字化して長期の利用と広範な活用に供することが、大学共同利用機関である本館の責務と考えて刊行した。刊行にあたって、著作権等の利用を許諾してくださった土方久功さんのご遺族の方々に厚く感謝する次第である。

最後に、土方日記を上梓できて安堵する一方で、本シリーズが多くの方に読まれ、多方面で研究などに活かされることを願い、刊行を終えることにしたい。



(作成：須藤健一)

図1 ミクロネシア全図

